

2014年5月4日礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記3章22～30節

説教：道半ばに倒れても

1 イスラエルの二つの家の争い

これまでの流れをふり返って整理しておきましょう。

イスラエルの最初の王であったサウルは、敵であるペリシテ人との戦いで倒れます。サウル家の将軍であったのはアブネルという名の人です。彼は、サウルの四番目の息子であるイシュ・ボシエテをイスラエルの王に立て、自分はその後ろ盾となります。

いっぽうダビデはそのとき何をしていたか。ダビデは、亡命先から母国イスラエルに戻ります。予想されたことでしたが、ダビデの家とサウルの家とは王座を巡り激しくぶつかり合うことになってしまいます。

これによってさまざまな悲劇が起こります。ダビデ家の将軍ヨアブとサウル家の将軍アブネルとが直接戦っていたときのことで、ヨアブの弟であるアサエルがアブネルの槍で突き殺されるということがありました。その日以来、ヨアブはアブネルに対して強い恨みを抱くこととなります。それが今日の箇所背景になっています。

ダビデは、戦争を避ける努力を続けてきました。けれども、問題はますます深刻になっていくばかりで、打つ手がない状態に追い来れます。ところが、まったく思いもかけない所から事態は急展開していきます。

発端となったのは、イシュ・ボシエテとアブネルとの関係です。イシュ・ボシエテがアブネルをまったく信頼していないことが明白になりました。これを知って、アブネルは決断します。自分はダビデの側につく。早速

ダビデのところを訪問します。ダビデは、盛大なパーティーを開きアブネルを迎え、これからイスラエルのために一緒に協力することを約束してアブネルを送り出した。それが21節までのあらすじになります。

和解に向けて順調に動き出したかに見えました。しかし今日の箇所で、一切の努力が水の泡となるような大きな事件が起きてしまいます。

2 アブネルを憎むヨアブ

1) まったく正反対の見方

ダビデがアブネルを送り出して間もなくヨアブが戻ってきました。自分が留守の間何があったのか一切を聞いたヨアブは、ダビデにこう言います。25節。「ネルの子アブネルが、あなたを惑わし、あなたの動静を探り、あなたのなさることを残らず知るために来たのに、お気づきにならなかったのですか。」

ダビデは、アブネルをまったく疑っていません。かえって彼を信頼し、お土産まで持たせてアブネルを送り返しました。自分とはとてもよいことをした。そう思って喜んでいたら、いきなりヨアブから言われてしまったのです。「ダビデ、あなたはなんと愚かなことをしたのか。どうしてアブネルを疑わなかったのか。」

皆さんもこれと似たような経験があるかもしれません。自分はこれが正しいと思ったこと、良かれと思ってしたことに対して、相手からまったく正反対の評価を聞かされる。ときには相手が怒り出すことさえある。いつ

たいどちらの判断が正しいのか、大変困ってしまうような経験です。

ダビデの場合はどうでしょう。アブネルがダビデをだまそうとしていたというのなら、ヨアブの忠告は正しいこととなります。でも事実は違いました。アブネルはダビデが王となるようにと、イスラエル中を駆け回り、むずかしい交渉を何度も重ねて説得してきたのです。だますために来たのではなく、ダビデを信頼してやって来たのです。

ではどうしてヨアブはアブネルを疑い、強くダビデを非難するのか。先ほど言いました。ヨアブは、アブネルに自分の弟であるアサエルを殺されたからです。アブネルを憎んでいます。その憎しみの思いがダビデへの非難の言葉に込められています。

このあとすぐにヨアブはアブネルを追い、わざわざアブネルがひとりになるように罠をしかけ、そこで殺してしまいます。

2)アブネルはアサエル殺しの報いを受けたのか

皆さん、これをどう思うでしょうか。アブネルがアサエルを殺したのは事実です。アブネルはこんなふうに関のやった報いを受けた。そうやって納得するでしょうか。もう一度、アブネルがなぜアサエルを殺さなければならなかったのか。その場面に戻ってみることにしましょう。

ダビデの家とサウルの家との衝突が激しくなるなかで、ヨアブとその兄弟たちはアブネルと直接対決する場面がありました。形勢不利となったアブネルは逃げようとするのですが、人一倍足の速かったアサエルがひとりを追いかけてきます。これを見たアブネルは二度にわたり警告します。「私を追うのをやめ

て、ほかへ行け。なんでおまえを地に打ち倒すことができよう。どうしておまえの兄弟ヨアブに顔向けできよう。」(2章22節)アブネルが、殺されるのがいやでアサエルに命乞いをしたわけではありません。ふたりの力の差が歴然なのです。戦いになったらアサエルが死ぬことがわかっているのです。そんなことをしたくないから警告するのです。でもアサエルは言うことを聞きません。それでアブネルはやむを得ずアサエルを殺すことになってしまいます。

3 アブネル

1)「人はうわべを見るが、主は心を見る」

神は、このことをどのように判断されたのでしょうか。第一サムエル記16章7節に、「人はうわべを見るが、主は心を見る」とあります。人は何をしたか、あるいはしなかったか、目に見えるところで評価を下そうとします。でも神は違います。何かをしたかではなく、心に何を思っていたのか、考えていたのか、そのことを見て評価されるというのです。

では、アブネルは何を考えていたのか。おわかりのとおり、できるならアサエルを殺したくないのです。なんとかしてそうならないように努力した。けれども、そうできなかった。これが、起きたことの本質です。神はアブネルの心をご覧になっています。アブネルは正しいとされます。

そうするとどうなるのでしょうか。ヨアブは弟アサエルの復讐を果たしましたが、それはよいことであつたのか。いいえ。ヨアブは正しい人を殺してしまったのです。その結果、ダビデが29節以降で預言しているように、後になってヨアブ自身がこのことの報いを受けることになります。

2) アブネルの誓い

神が正しいとされ、ダビデも高く評価したアブネル。彼はかつてこう告白していました。3章9、10節。「主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私が彼に果たせなかったなら、神がこのアブネルを幾重にも罰せられますように。サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるということを。」

アブネルは、この誓いのとおりに、ダビデをイスラエルの王とするため一生懸命働きました。けれども、道の半ばで倒れてしまいます。そうしますと、「主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私が彼に果たせなかったなら。」アブネルの誓ったこの言葉はどうなるのでしょうか。道の半ばで倒れたのですから、「私が彼に果たせなかった」ということで、アブネルは神に罰せられるのでしょうか。もちろんそんなはずはありません。ならば、「運が悪かった。しょうがないことだ」という話なのでしょうか。人間が人間に誓った言葉であるなら、それで済むかもしれません。

でもこれはアブネルが神に誓った言葉です。簡単に取り消されるものではありません。たとえアブネルが道の半ばで倒れたとしても、なおこの誓いは有効であると考えべきでしょう。

3) たとえ道の半ばで倒れても

どういうことでしょうか。「ダビデは最初からイスラエルの王となるのは決まっていた。アブネルがたとえ死んでも、ほとんど影響はない。」そう思いますか。いいえ、神は

そのような方ではありません。神はアブネルが誓ったとおりのことをされます。アブネルは死んでも、神は彼の死を驚くべき方法で用いていくのです。

イエスはこう言われました。「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」(ヨハネ12章24節) 主は、ひとりの死を用いて多くの人のために活かしていく。そのような死があり得るのだと教えます。では、アブネルの死はどのように用いられたのか。

アブネルが殺されたことを知って人々はうわさを始めます。彼を殺させたのはダビデではないのか。ダビデはアブネルをだまし討ちにしたに違いない。ダビデへの憎しみと不信が高まり、事態は最悪の方向に転げ落ちていきます。

苦境に立たされたダビデはすぐに、「自分は無実である」と宣言します。でも、このことばだけ聞いて信用する人はまずいません。どうすれば信頼してもらえるのでしょうか。ごまかしはききません。ダビデは自分の本当の姿をつつみ隠さずさらけ出す覚悟をします。全国民の前で涙を流してアブネルの死を嘆き悲しみます。王となるべき方なのに、身を低くし、小さくなります。そんな姿を人々に見せます。人々はそれを見て思いました。「ダビデは本当のことを言っている。嘘をついていない。」そして次第にこう願うようになります。「ダビデこそイスラエルの王になるべきではないのか。」人々の心は次第にダビデを王として迎える方向に導かれていきます。

どうでしょうか。ひとりの将軍の死がイスラエルの和解のために大きく用いられて

いったことが見えるでしょう。これが主のなさるわざです。

私たちは、アブネルのように殺されることはないかも知れません。でも、いろいろな意味で道半ばで倒れていくような者です。心の中に願いは沢山あります。やりたかったことも沢山ある。けれども、あるときそれを全部手放して死ぬしかありません。人の目には、死は敗北にしか見えません。

けれども主はどうでしょうか。「人はうわべを見るが、主は心を見る。」あなたは何をしたか、そんな業績で評価するものではありません。目には見えないけれど、私たちの心にある願いと祈りを、主はご覧になっています。一粒の麦が死ぬとき、豊かな実を結んでくださる。それが私たちがいただいている約束です。

このようなことをしてくださる主を信じて歩みたいと願います。